

岳撰述之。同年十月、微妙公於小松城逝去、追薦之香語呈上之。諷經燒香相勤、寛文三癸卯年秋九月九日示寂。享年八十有四。建塔於傳燈寺。

右履歷は舊藩中傳燈寺より金澤寺社所へ書出したる文言なり。傳燈寺はもと佛林派なりしかど、千岳和尚利常卿の命に依つて中興の住職と成る。依之今に至り妙心派と成りたり。貞享二年の禪栖院由來書に、承應二年傳燈寺住職三峰遷化無住之節、他派之僧千岳先借住被仰付故、佛林派之僧共、縱借住に候共、他派に被仰付而者、末寺之僧共出世不罷成、迷惑仕由申上處、最早千岳に借住之旨被仰渡間、重而住持代り目之儀与奉行中被仰渡故、爲證據傳燈寺校割共寶圓寺へ預け置度、寺社奉行へ斷申上、則校割共寶圓寺へ持參預け置。其後寶圓寺住持代りに付、右校割共禪栖院へ請取、千岳隱居願之節、又々寺社奉行へ斷申入處、中將公江戸に被成御座、ケ様之儀難申上由にて、書付被返。とありて、彼の申立許容無之と也。

○千岳禪師傳話

三壺記に云ふ。寛永十二年六月上旬の事なるに、金澤馬廻

組飯尾權右衛門の妻死去す。淨土宗なれば卯辰山如來寺にて葬送す。權右衛門は禪宗にて、寶勝寺の旦那なり。殊に亡者は前田出雲の姪なり。寶勝寺の住職千岳和尚は出雲と念頃なる檀那なり。旁よしみあるに付、千岳諷經に出でられたり。如來寺玄文和尚は亡者の導師にて引導し、喝を高声に唱へて、炬を投げ懸けたり。千岳聞いて、淨土の一喝珍敷事哉と思ひながら歸寺せられたり。一七日には如來寺にて法會執行、二七日には飯尾權右衛門の邸宅へ千岳を請じ、法會執行し、少齋を施し、茶の上に咄になる。千岳語つて曰く、今度如來寺一喝を示す。是に二つの遠慮あり。禪家に一喝の事は初祖臨濟惠照禪師より代々血脉傳受を以て、我が宗に一喝を許す。尤秘法とす。然るに如來寺他の妙語をかり用ふるにや。また我が眼前にある故に、拙僧に聞かしめんとて廣言にて云ふやらん。兩やうともに邪氣の致す處也。正道にあらず。引導の儀は指置きて、我が廣言を專にす。沙門の上に嫌ふ處也。我知、我見、我愛、我慢は諸法にいましむる處の根元なり。玄文は隨分の談議坊主なり。然るに依つて、興に乗じ我がまゝの氣出來、偏に法の

邪魔と云ひつべしと物語せられたり。權右衛門聞いて、さも有べきと挨拶す。座中に淨土宗の者あり。亡者の召仕なる者如來寺へ參り、玄文和尚に語つて曰く、寶勝寺の和尚、權右衛門方へ來て、一喝の物語の上に、淨土宗は邪魔外道の法といはれたり。一喝と云ふ事は有難き事にて候哉と語りければ、玄文和尚俄に氣色替り、千岳の賣主坊主めが何を知り申さん。三體詩・江湖集・風月往來など讀み覺えて兒童に教へ、世にもてはやすなり。一切衆生成佛の他力大乘の事は何と知るべき。大海と一滴程の相違也。中々の事を申小僧めやと散々に高聲にいかりければ、はや方々に取沙汰す。されども指して沙汰もなかりけるに、頓て八月月上旬時正の頃に成り、彼岸の初より結願の畢まで、千岳誹謗の談義止む事なく、聽衆に向つて惡口千萬思ひのまゝなり。毎日の聽衆方々にてさんだんす。互に淨土・禪宗とて不和に成り、武家・町方家々にて批判宗論夥しく、男女の間に申分出來す。歴々の參會に必ず此の咄出で、喧嘩のもともなりとて、遠慮して止みにけり。千岳より度々使僧を以て、論議に及ばんと申遣す。何れ宗論を企て是非を究めんと、

老中へも相談有りけれども、江戸の御普請にて兩殿も在江戸也。宗論の儀は江戸へ言上し、御下知に依つて判者を呼び下し、其の上の沙汰也。去れども天下の宗論は既に御制禁也。其の上教相の法には他をそしり、我が宗を建立せんと、愚昧の尼・入道を濟度利生する處の法なれば、千岳等の輩聞上げて宗論せん事、幼童の機に似たり。不可有構事とて、公儀の沙汰は止みにけり。然共下々には餘事を企て、此の沙汰のみにてかまびすし。千岳も兩度まで書札を以て如來寺へ問訊すといへども、返簡なし。然るに依つて、千岳近日如來寺へ驅入りて問答せんとよし、世間に其の沙汰隠れなく、如來寺には爰はと云ふ談義坊主口明け共寄合ひて、我にまかせ人にまかせと、聖教闕疑明目等を開き、祖師の言句を書き出して待ち請ける處に、千岳は普明院へ咄の爲に乗物を催す。すは千岳こそ如來寺へ發向すと、金澤中の僧俗如來寺へ充滿す。如來寺も誠と思ひ、一宗悉く來集す。千岳は何の心もなく、金首座方より歸寺致されければ、淨土宗には千岳應して半途より歸ると沙汰す。されど七十五日も過ぎけるにや、其の沙汰ひしと止みにけり。